

35. 知的な気付き

教育課程審議会の答申において、生活科の改善の基本方針について次のとおり提言されました。

「児童が身近な人や社会，自然と直接かかわる活動や体験を一層重視し，こうした活動や体験の中で生まれる知的な気付きを大切にする指導が行われるようにするとともに，・・・」

このように，改善の基本方針の一つに「知的な気付きの重視」が示され，それに基づいて指導要領の改訂が行われました。

知的な気付きとは

子供は，対象と直接かかわることによって，様々な「気付き」を得ている。「気付き」は，本来主観的で個人的な要素を含んでいて，意味付けや関係付けという過程をたどらず，直観的で一過性の傾向をもつため，経験化されにくい。そのような「気付き」は，見る，触れる，遊ぶといった子供の主体的な活動の中で得られる。そして，驚いたり，発見したり，納得したりすることを積み重ねていき，活動が広がったり，深まったりすることによって，また，友だちとの交流や教師の支援などを通して，「気付き」は，はっきりとした認識にまで高まっていくのである。

「知的な気付き」とは，もちろん単なる「知識の獲得」や「科学的な認識」を指すものではない。生活科は従来の教科のように，すでに一定の内容があり，それを子供に学び取らせていくというようなものではないからである。子供自身の興味・関心や切実な課題意識を大事にし，子供なりの課題の追求を中心にしながら，自分なりに獲得した知識や経験を関係付けたり，意味付けたりしていく営みを重視しなければならない。

—— 実践から ——

動くおもちゃ（車）を作る活動を考えてみよう。車にタイヤをつけるのに棒を通すことにします。最初は，棒を刺す位置など意識しないで活動していますが，「うまく転がしたい」という願いから，試行錯誤しながら，タイヤの中心に刺すとうまくいくことを見つけ出します。その活動により，円の中心ということを意識し始めます。体験の繰り返しや関連的な体験的活動の中で，知的な要素が加わっていきます。